

聖書：コリント人への手紙第一 14：33b～40

説教題：適切に、秩序正しく

日時：2023年1月15日（朝拝）

12章から見て来た御霊の賜物に関するパウロのメッセージの最後の部分です。コリント教会では教会員が賜物を誇って互いに競い合い、また見下し合っていました。特にその中心にあったのは異言の賜物でした。異言はそのままでは聞く人々が理解できない言葉で、そのため余計に人々注目を引きました。これを話せる人がこれ見よがしにあちこちで語り、コリント教会の礼拝は混乱と無秩序が支配していたようです。そんな彼らにパウロは32節で「預言する者たちの霊は預言する者たちに従います」と言いました。読んですぐ理解するのが難しいような言葉でしたが、その意味は御霊に導かれている人は自分をコントロールできるということでした。反対から言えば御霊の導きの下にあるからと言って自分勝手な行動を取り、それを聖霊のせいにはできないということです。33節でパウロは「神は混乱の神ではなく、平和の神なのです」と言いました。ですからもしそこに混乱をもたらしているなら、それは聖霊から出ていることではない。御霊に導かれている人は自分を正しく制御できる人であり、平和の神を映し出す人でなければならない。それによってその人は本当に御霊に導かれている人かどうかテストできるということでした。

今日の箇所も同じ流れの中にあります。パウロは「聖徒たちのすべての教会で行われているように、女の人は教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません」と言います。なかなか理解するのが難しそうな言葉です。ある人々は何と何を聖書は語っているのか！と憤慨するかもしれません。しかし聖書を読む際の基本原則は——他のすべての文書もそうですが——前後関係（文脈）の中で読むことです。ここは29節から語られている預言についてのガイドラインという文脈の中にあります。29節でパウロは「預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい」と語りました。そしてまず「二人か三人が語り」という部分について、どういう順序で語るのか、一人が話している時にもう一人に啓示が与えられたらどうするかなどについて30節～33節前半まで語りました。そして今日見ている部分は29節後半の「ほかの者たちはそれを吟味しなさい」という部分に関わると考えられます。預言と称して語られることはすべて無批判に受け入れられるべきではなく、本当に神から出たものかテストしなければなりません。そのプロセスにおいて、

ある女性たちが踏み込んで来た場合のことを語っていると考えられます。ある女の人たちは、語られた預言に対して色々質問したり、意見を述べたり、反対したりなどして、その議論をヒートアップさせる方向に一役買っていたと考えられます。それが一層の混乱をもたらしていたと思われれます。

11章でも似たようなことが言われました。そこではある女性たちがかぶり物を着けずに礼拝に参加し奉仕していた問題について語られました。彼女たちはキリスト者の自由を盾にとって、今やキリストにあっては男女平等、男も女もない。女だけがかぶり物を着けなければならないということはない。男と同じ格好をしても良いと主張して教会に混乱を巻き起こしていました。この14章も同じです。今や男も女もないと主張して預言を吟味するプロセスに口を挟み、色々たくし立てて混乱を生じさせていたのでしょう。

そんな彼女たちに対してパウロは「女の人は教会では黙っていなさい」と言います。なぜ女の人だけなのでしょう。34節の最後でパウロは「律法も言っているように、従いなさい」と言います。これはどこに書いてあることでしょうか。すでにパウロは11章の議論でそのことを示していました。11章8～9節：「男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。」 **これは創造の秩序について語っているもので具体的には創世記2章21～24節にあります。**もちろんこれは男女間の優劣を述べたものではありません。11章でもパウロは誤解のないように11節で「**とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません**」と述べて男女の相互依存性、平等性について述べていました。しかしそこには神が定めている秩序があると言っています。11章3節：「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」これを順番に並べると、神、キリスト、男、女となります。神とキリストは言うまでもなく同等です。優劣はありません。しかしその神の間にも秩序があります。それと同様、男女は平等ですが、その関係には秩序があります。それは創造の経緯に示されています。**たまたま男女はあのような順序で造られたのではなく、そこには男女の関係に対する神の深い御心が示されています。**パウロはテモテへの手紙第一2章11～13節でも同じことを次のように述べています。「**女は、よく従う心をもって静かに学びなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。むしろ、静かにしていなさい。アダムが初めに造られ、**

それからエバが造られたからです。」

私たちが心に留めるべきは、この創造の秩序は墮落前のものであるということです。墮落後にこのような男女関係の順序が生じたのであれば、キリストにある救いによって正しい状態に修正されるべきということになりますが、創造の秩序は墮落前のものです。この世界のあり方についての神の御心です。ですからこれが正しい状態です。救いとは本来あるべき状態への回復だとするなら、救われたクリスチャンは益々この神のデザインに沿って生きるように導かれるべきです。今日は時代が違う！などの一言をもって投げ捨てることはできません。そうすることはむしろ神の本来の定めからの離反を意味することになります。パウロはこの創造の秩序に基づいて、この秩序をひっくり返すようなあり方は正しくないと言ったのです。そういう意味で「黙っていなさい」と言ったのです。「従いなさい」という律法に沿った振る舞いをするようにと言っているのです。

ここの解釈でやや難しいのは、先ほど触れた 11 章の 5 節では女の人でも祈りや預言ができると言われていたことです。「預言ができる」のに「黙っていなさい」とはどういうことか？と。この二つを比較して分かることは、今日の箇所「女の人には黙っていなさい」という言葉は絶対的な意味で言われているわけではないということです。祈りはもちろん預言も女の人ができると言われていました。この預言とは、これまで触れて来た通り、厳密に言えば当時に特有のもので、新約聖書がまだ存在していない時代の聖霊の啓示と関連します。しかし今日の箇所では預言の吟味です。これは権威を持って判断されることです。教会が従うべき教えとして公的に確定されるプロセスのことです。そこに女の人が入って行って男の人とやり合うのは正しくないということなのです。パウロは 35 節で「もし何かを知りたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい」と言います。疑問に思うことがあればもちろん問うて良いのです。意見を述べて良いのです。さらに知ることを求めて良いのです。しかしそれは家でしなさいと言われます。もちろん家でも夫と妻に対する神の御心、創造の秩序を受け止めつつです。しかし「教会で語ることは、女の人にとって恥ずかしいこと」だとパウロは言います。この「恥ずかしい」という言葉は 11 章 5～6 節にも出て来ましたが、社会的に見て恥ずかしいという意味です。女の人がキリスト者の自由を主張して男の人と論じ合い、声を荒げて議論するような姿は当時の文化においては恥ずかしいことであった。その夫はその妻の振る舞いによってまごまごさせられ、恥じ入らされる。

その家族も恥ずかしい思いにさせられる。さらには教会全体もそうです。そういう社会でどのように振る舞うのが正しいのでしょうか。それはそこに自ら入り込んで行かないということです。そこでは黙っているということです。疑問点や意見があれば家に帰ってから夫に話せと言われていました。このように言われなければならないほど教会の公の場で自分を主張し、その場を混乱へと陥れていた女性たちが実際にいたということなのでしょう。

36 節でパウロは「神のことは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。」と問います。今日の箇所最初の 33 節後半に、このことは「聖徒たちのすべての教会で行われている」と言われていました。その諸教会の慣習を無視してわが道を行こうとするのは、あなたがたが神の前に例外的で特別な存在だからなのか。あなたがただけに神からの特別のお告げがあったのかとパウロは問います。彼はこうして教会は他の教会で重んじられていることを蔑ろにしてはならないと言います。一つの教会は全体で一つの教会の一部です。ですから独善的になってはいけません。他の教会からも学び、自分たちのあり方を再検討する必要があるのです。

37 節以降はこれまで述べて来たことのまとめとなる部分です。パウロは「だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら」と述べていますが、コリント人たちはまさに自分たちは霊的な人だと自負していました。それなら、その人はパウロが書いた言葉を主の命令だと認めよと言われていました。ここに聖霊に導かれている人とは何か突飛なことをする人、奇抜なことをする人、どこに飛んで行くか分からない人ではなく、使徒パウロの言葉に一致する人、それが主に由来することを心から認めて従う人であると言われていました。直前で語られた男女論についてもそうです。その前に彼が書いて来たすべてのメッセージも然りです。これが御霊の人であるかどうかのテストであると言われていました。それを無視するならその人自身が無視されると続きます。誰によってでしょう。それは神によってでしょう。パウロの言葉は無視する人は主の命令を無視する人であり、主を無視する人です。そして主を無視するなら、その人はやがて主から「わたしはあなたを知らない」と言われることになります。主から知らないと言われることはさばきを意味し、永遠のいのちに関わりません。それほど重大なことであると警告されています。

39 節はこれまで見て来た預言と異言についてのまとめです。預言は理解できる言葉で話されるもので、聞く人々の助けになり、その成長に仕えるものとなります。ですからこちらのよりまさる賜物を求めよ！とパウロはずっと語って来ました。しかしだからと言って行き過ぎて異言を禁じてはならないとも言われます。異言は解き明かされば預言と同じように有益ですし、個人の礼拝において意味あるものです。

最後 40 節で「ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい」と言います。今日のまとめとして、ここから二つのことを述べて終わりたいと思います。まず一つ目は、パウロは御霊の働きを誤ってとらえて混乱状態に陥っていたコリント人たちに對して、本当に御霊の導きの下にあるならすべてのことは適切になされ、秩序正しい状態が見られるはずだと述べて来ましたが、今日見た男女の秩序論もこの下で考えられるべきであるということです。先に触れた通り、これは創造において神が定めておられる秩序であり、私たちの本来的なあり方を規定しているものです。今日の人々には一見受け入れがたく思われるかもしれませんが、私たちは自分の考えや感覚は一旦脇に置いて神の御心に良く思いを向けなければなりません。

11 章のかぶり物を見た際にも申し上げましたが、今日への適用に当たってはもちろん当時の文化と今日の文化との違いは考慮されるべきです。当時は男はかぶり物を着けず、女はかぶり物を着けて公的な場所に出るのが一般的でした。そのような文化の中で女がかぶり物を着けて礼拝に出ることは創造の秩序に照らしても何の問題もないことであり、むしろ自然で適切なことでした。キリスト者の自由とか、聖霊に導かれた新しい人間と主張して、それらをひっくり返すことは、当時の文化においては神が定めている秩序の無視、あるいはその逆転、その否定を象徴するものでした。ですからそうしてはならないと言われました。しかし今日の私たちは違う文化の中にありますから、これと同じことをそのまましなければならないということにはなりません。今日見た預言の吟味も同じです。先に見た通り、厳密な意味での預言は今日ありません。しかし聖書を用いて語られたことが本当に神のメッセージとして受け入れるべきであるかどうか吟味すべきであるという原則は残っています。その吟味において今日、様々な場面で、またレベルで、女性も意見を述べたり、ディスカッションすることはあり得ると言えます。またそれが益をもたらすものとなると考えられます。しかし大事なことは、私たちが生きている文化の中で、神がはっきり示しているこの「創造の秩序」という基本原理をどのように表現して行くかということです。文化は変わり、

その表現方法は変わっても、基本原理は変わりません。神は男をかしらの役割を果たすものとして造り、また女を「律法も言っているように、従いなさい」という役割を果たす者として造られたことを、私たちが受け止め、重んじていることが現わされるようにして行かなければならないということです。これはもちろん女性だけの課題ではなく男性の課題でもあります。女の人に言われている「従いなさい」という神のメッセージを女の人が喜んで果たすことができるようなリーダーシップ、仕えるリーダーシップを男性は発揮して行かなければならないということでもあります。そうして神が定めている秩序に従って生きることを、聖霊に導かれているクリスチャンは益々求めなければならないことを今日の箇所は私たちに示しています。

二つ目としてより大きく、ここに「御霊」と「秩序」の関係について学ばされます。一見、「御霊」と「秩序」は相反することのように思っている方が少なくないのではないでしょうか。御霊に導かれている人は秩序などには縛られず、むしろそれを壊し、もっと自由に、どこにでも飛んで行くものであるかのように考えていることはないでしょうか。しかしパウロが御霊の賜物に関する話の結論部で強調していることは、神は平和の神であり、秩序の神であるということです。ですから平和や秩序正しい状態といった実が結ばれなければ、それは聖霊から出たものとは言えない。むしろ先週参照したヤコブ書 3 章 15～18 節に記されている通り、秩序の乱れはねたみとか利己的な思いから発生し、さらには悪魔に由来するものです。聖霊は私たちが勝手気ままな人とするのではなく、むしろガラテヤ書 5 章の御霊の実のリストにある通り、「自制」という実を結ばせます。そして私たちが自分を制するのは他者の益に仕えるため、愛に生きることに自分をささげるためです。そうする人は教会の成長に仕え、神の平和を広げ、促進する人になります。この光の下で自分自身をテストしたいと思います。真に御霊に導かれている者として「適切に、秩序正しく」行動する者となり、平和の神を映し出す人となることができるように。そして神が備えてくださっている祝福に私たちの教会が豊かに生かされるために、聖霊により、御言葉に従って、仕える歩みをする者へ導かれて行きたいと思います。